

自衛のための戦争

先号に引き続き、著者福井雄三の許しを得ずに『坂の上の雲』に隠された歴史の真実を引用してノモンハン事件を書く。これを剽窃という。私は小説家ではないが司馬や五味川同様、私情と主観がありそれが文章の随所に出るので、裁判官は「剽窃とはいえない」と判決を下すだろう。

国は国益のためにウソをしく

粉飾決算とは顧客や株主の信用をつなぎとめるための利益の水増し、あるいはその反対の税金逃れの所得隠しである。

清廉潔白な会社は百社に一つ。どこの会社も身に覚えがある。だが長期間に渡り大胆に行わなければ発覚しない。また内部告発があってもそれをマスコミや検察がとりあげなければ事件にはならない。

最近では岡山の優良企業(株)林原がメインバンクの中国銀行と住友信託銀行に借入金の粉飾を暴露し、すったもんだの未会社更生法を適用。創業家の経営者林原一族が辞任し、会社ごと長瀬産業に買収される「事件」があった。高上高利益を出し、将来、伸びる」と見られていた優良企業である。メインバンクの粉飾指摘は内部告発に近い。林原社長や専務は飼

い犬に手を噛まれた思いだろう。ところが会社の粉飾はまだ罪が軽い。重大なのは国家の「粉飾」である。

大東亜戦争の末期、軍の最高機関の大本営は連日粉飾発表を行った。「敵に甚大な被害を与えた。我方の損害は軽微」と具体的に数字を挙げて国民に報せた。敗戦戦

さすかに「勝った」と言えなくも病氣と物量不足で全滅した事実を「玉砕」と発表した。玉砕とは玉のように美しく砕け散る名譽ある死である。国民が戦意をなくさないための粉飾である。

敗戦後、このウソを知悉した国民は大本営と軍人を蛇蝎のごとく嫌い軽蔑し、東京裁判などで軍人が重刑を科されても同情する人は少なかった。

だがこうした粉飾は日本だけではない。どの国もしている。自国に不利なことは隠し、損害は微少に言い、戦果は過大に言う。「ウソをついてはいけません」は子供の道徳教育であって、国の責任者がこんな「ウソ」もつけない幼稚な頭脳では仕事にならない。

たとえば平成十二年(二〇〇一)北朝鮮拉致被害者五人が一議員になる前から拉致問題に取り組んでいた当時の官房副長官安倍晋三の功績である。小泉総理大臣に同道した安倍は、相手が言う五人の生存者の帰国を強く要請した。金正日は日朝の国交正常化(金をめぐるでもらう)のため、「一時帰国」を条件にこれを承諾した。そして一時帰国した五人を安倍は北朝鮮に送り返さなかった。北

朝鮮は「小泉は約束を破った。裏切った」と怒った。この会談のお膳立てをした外務省アジア大洋州局長田中均は面子を潰されてたけり狂った。当時の福田康夫官房長官や自民党の加藤紘一、そして一部マスコミも「北朝鮮との関係が悪くなるから約束どおり帰国させよ」と安倍小泉を責め立てた。安倍と小泉は応じなかった。それを中山恭子が応援した。約束を破り、ウソをつきとおした。

ここ数年間の腰抜けの日本外交の中で、これは見事な一本勝ち、光り輝く歴史の出来事である。国家は国益のため、国民のためウソをつく。

「ノモンハン戦後、ソ連はソ連の死者九二八四名、日本軍の死者五万二千五百五十名と発表した。敵の死者数が正確に把握されたかもしれない。

ノモンハン戦後、ソ連はソ連の死者九二八四名、日本軍の死者五万二千五百五十名と発表した。敵の死者数が正確に把握されたかもしれない。

ノモンハン戦後、ソ連はソ連の死者九二八四名、日本軍の死者五万二千五百五十名と発表した。敵の死者数が正確に把握されたかもしれない。

ノモンハン戦後、ソ連はソ連の死者九二八四名、日本軍の死者五万二千五百五十名と発表した。敵の死者数が正確に把握されたかもしれない。

ノモンハン戦後、ソ連はソ連の死者九二八四名、日本軍の死者五万二千五百五十名と発表した。敵の死者数が正確に把握されたかもしれない。

ノモンハン戦後、ソ連はソ連の死者九二八四名、日本軍の死者五万二千五百五十名と発表した。敵の死者数が正確に把握されたかもしれない。

ノモンハン戦後、ソ連はソ連の死者九二八四名、日本軍の死者五万二千五百五十名と発表した。敵の死者数が正確に把握されたかもしれない。

経宮管理講座 305 染谷和巳

敬意と感謝の心を持ってなくなった。司馬の乃木希典無能論と同じく、五味川の軍隊(国家)悪人論は世論となり歴史的事実として定着した。

その五味川が同じ主題で昭和五十年に出したのが「ノモンハン」である。日本は悪い、軍隊はひどい。ソ連はすばらしいという主題だからこれに反することは書かない。ソ連がなくなり、過去の極秘資料がつかぎつき公開された。この数字が強い日本軍、弱いソ連を証明した。この小説は史実とは異なる、通俗小説、娯楽小説に過ぎないことが解った。

司馬は晩年、最後の大作として「ノモンハン」を企画し資料を集め取材をしていた。書かずしてしまっただけ、もし世に出していれば、五味川との相乗効果で日本人の歴史認識はさらに片寄ったものになっていたろう。

代わって半藤一利が平成十年

「悪い国日本、侵略国家の日本が太平洋戦争を起こした」これが東京裁判史観でありアメリカの判断である。連合軍総司令官D・マッカーサーがこの判断を基準に裁判を行った。

昭和二十五年(一九五〇)六月朝鮮戦争勃発。その十月、マッカーサーはトルーマン大統領に「東京裁判は誤りだった」と告白した。昭和二十六年司令官を解任されたマッカーサーは議会の公聴会で「日本の戦争は安全保障の必要に迫られた自衛のための戦争だった」と、演説した。

ソ連、中国、北朝鮮の共産軍と直接戦争を行って、戦前の日本の立場を理解したのである。

「過去百年でアメリカが犯した最大の政治的誤りは共産勢力を中国で増大させたことである。アメリカはつぎの百年間でその代償を

払わなければならないだろう。」マッカーサーは神様ではないからその言を盲目的に信じるわけではないが、敵将の反省の弁として素直に傾聴したほうがいい。

満州国は共産主義から五族(日本、朝鮮、中国、蒙古、満州)を守る防波堤だった。

ソ連は共産主義に反対する人々を強制収容所に入れ拷問処刑した。ソルジェニーツィンの「収容所群島」は各地にある収容所が酸鼻をさわる状況であることを記している。またソ連はモンゴルなど他民族を武力で支配し従わない人々を虐殺。こうして連邦の領土を拡大してきた。当時満州国に隣接する外モンゴルはソ連に武力支配され属国となり、モンゴル人はソ連の先兵として戦わされた。

ソ連から祖国を守るため、満州防備の関東軍三万名は二十三万のソ連軍と戦ったのだ。(続)

五味川純平の「人間の条件」(昭和三十年一九五五)は侵略国を日本、軍隊という非人間的な組織、兵隊を虫けらのごとく扱う上層部を描き出している。昭和二十一年八月ソ連軍が怒濤のごとく満州国に攻め入る。守備兵の主人公は塹壕を這い出て、理想の国ソ連の理想の軍に向かって歩いて行く。捕虜となってシベリアに抑留されるが、客観的に見れば敵前逃亡の裏切り者である。

この本を読んだ人は日本は悪い、日本の軍隊はひどい、それに

対する誇りを失い、先人に対する敬意と感謝の心を持ってなくなった。司馬の乃木希典無能論と同じく、五味川の軍隊(国家)悪人論は世論となり歴史的事実として定着した。

その五味川が同じ主題で昭和五十年に出したのが「ノモンハン」である。日本は悪い、軍隊はひどい。ソ連はすばらしいという主題だからこれに反することは書かない。ソ連がなくなり、過去の極秘資料がつかぎつき公開された。この数字が強い日本軍、弱いソ連を証明した。この小説は史実とは異なる、通俗小説、娯楽小説に過ぎないことが解った。

司馬は晩年、最後の大作として「ノモンハン」を企画し資料を集め取材をしていた。書かずしてしまっただけ、もし世に出していれば、五味川との相乗効果で日本人の歴史認識はさらに片寄ったものになっていたろう。

代わって半藤一利が平成十年

ソ連の南下策から祖国を守る

「悪い国日本、侵略国家の日本が太平洋戦争を起こした」これが東京裁判史観でありアメリカの判断である。連合軍総司令官D・マッカーサーがこの判断を基準に裁判を行った。

昭和二十五年(一九五〇)六月朝鮮戦争勃発。その十月、マッカーサーはトルーマン大統領に「東京裁判は誤りだった」と告白した。昭和二十六年司令官を解任されたマッカーサーは議会の公聴会で「日本の戦争は安全保障の必要に迫られた自衛のための戦争だった」と、演説した。

ソ連、中国、北朝鮮の共産軍と直接戦争を行って、戦前の日本の立場を理解したのである。

「過去百年でアメリカが犯した最大の政治的誤りは共産勢力を中国で増大させたことである。アメリカはつぎの百年間でその代償を